

# 最近のアンボン情勢についての覚書

河野佳春\*

## A note about the recent situation of Ambon

Yoshiharu Kawano\*

### Abstract

In this note I have tried to survey the recent situation of Ambon, from February 2002 to September 2006, through analyzing articles of newspapers and internet websites. At the present time men say that after Malino II, Ambon is basically in stabilization process. I agree with them for the time being. But then I think that in the present day at Ambon any other conflicts are freshly developing. For instance, firstly a conflict between RMS-FKM and anti-RMS-FKM has come to the surface, secondly a conflict between refugees and except them caused a clash between two villages in Seram, and thirdly the tension between police officers and army soldiers has warmed up. For the present I think that in these conflicts any unknown factor is concerned, so before the realization of peace in Ambon, a lot of issues have remained.

### 0. 序

#### 0. 1 はじめに

本稿は、2002年2月以降2006年9月時点までのアンボン情勢について、概観を試みるものである。筆者はこの地域を、約10年にわたって歴史研究の対象としてきたが、一般にわが国において、なじみの薄い地域であろうと思われるので、以下一通りの説明を加える。なお、付録として関連する地図などを添付するので、適宜ご参照いただきたい。

アンボン地域は、インドネシア共和国東部のマルク諸島のアンボン島とその周辺部であり、ルアシ (Lease) 諸島、セラム島 (Seram)、ブル島を含める。行政的にはマルク州に属し、アンボン島のアンボン市はその州都であり、経済的中心でもある。宗教的にはキリスト教徒が約6割、余の大半がムスリムで、両者の拮抗する地域である。

マルク諸島はわが国では一般的にモルッカ諸島、香料諸島などとして、16世紀にヨーロッパ人が、当時ヨーロッパで高価であった、スパイスを求めて押し寄せたことで知られている。

その中であってアンボンは、「アンボイナ事件」ないし「アンボン事件」によって記憶されているであろう。この事件は1623年に、オランダ東インド会社が、当時スパイス貿易で競合していた、イギリス東インド会社のアンボン商館員ら (イギリス人10名、日本人傭兵9名、ポルトガル人1名) を、捕らえ拷問の上処刑した事件である。

あるいは、映画「アンボンで何が裁かれたか」などで、

第二次大戦中日本海軍が、根拠地として占領支配したことを、ご存知の方も多いかもしれない。前世紀の末以降は、地域紛争が起き外国人の立ち入りが難しくなっているが、それ以前は日本の遠洋漁船が多数寄港する場所でもあった。

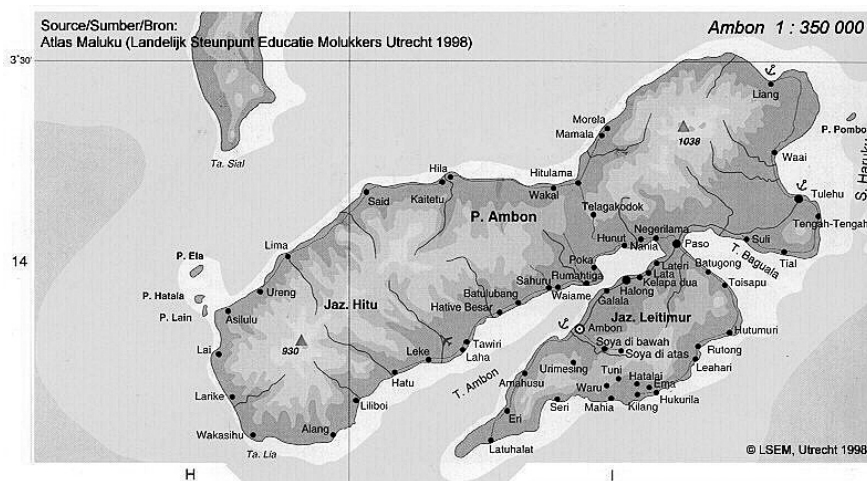
#### 0. 2 背景

前世紀末以降アンボンでは、キリスト教徒住民とムスリム住民の間に紛争が発生し、これが現在に至るまで継続している。ただし紛争は、アンボンでだけ発生したのではなく、インドネシアのさまざまな場所で同じころに発生し、その多くが現在も続いている。<sup>(1)</sup>

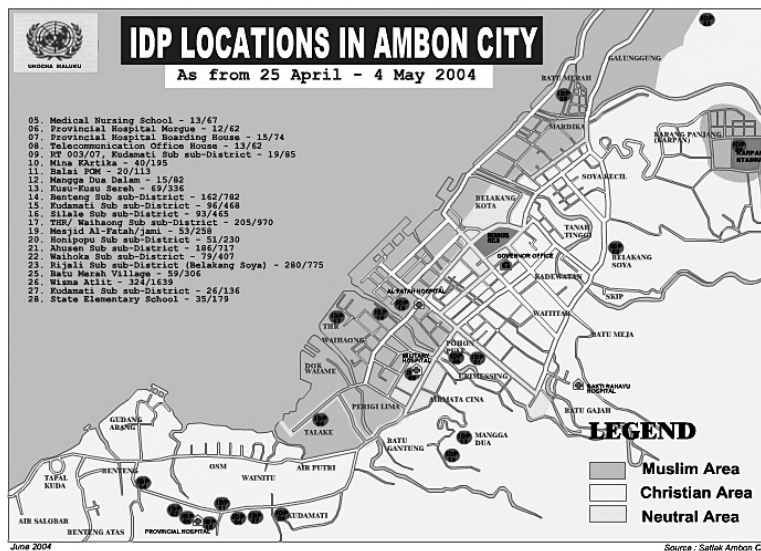
インドネシア全体では、1997年の通貨危機<sup>(2)</sup>以降、当時のスハルト政権に対する不満が民主化運動の形で吹き出すとともに、各地域においても中央政府に対する反発や、その政策によって導入された移民への敵意などが表面化した。

長年にわたって分離独立運動が続いてきたアチェ<sup>(3)</sup>や東チモール<sup>(4)</sup>はもちろん、アンボンを含むマルク州の各地やニューギニア、スラウェシ島各地などで、さまざまな理由 (独立、宗教、民族) による対立が紛争を引き起こした。<sup>(5)</sup>

さらに、2001年9月11日の合衆国同時多発テロ事件以降、合衆国が「テロとの戦い」の名の下にアフガニスタン、イラクに侵攻し、全世界のムスリムの間に反欧米・反キリスト教傾向が強まると、インドネシアでもイスラム原理主義過激派の活動が活発化し、イラクなどでの過激派を支援するほかに、国内でも欧米人観光客や、欧米



アンボン島



アンボン市

諸国の外交公館を狙ったテロ事件を実行するようになった。(6)

### 1. 2002年2月までの地域紛争

#### 1.1 紛争の発生

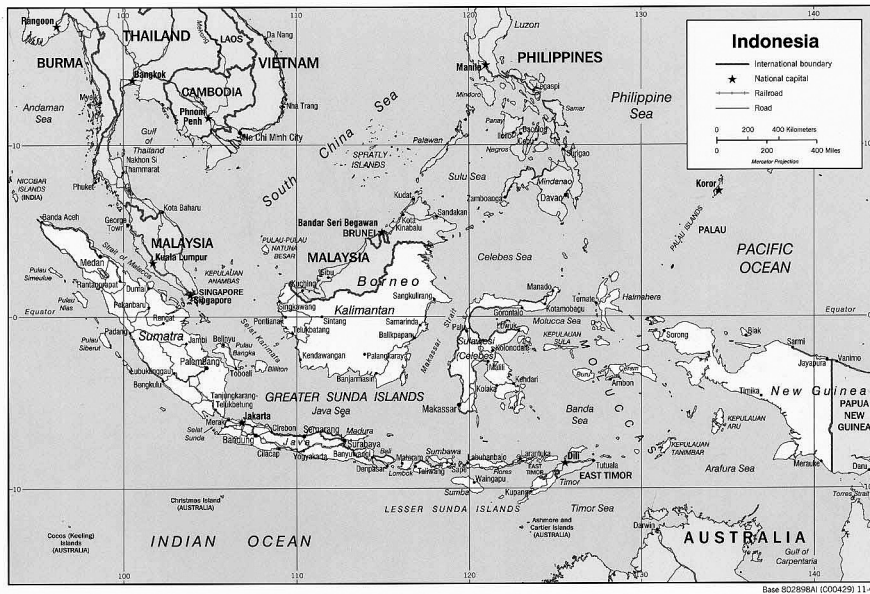
アンボンでの紛争は1999年の1月に始まったが、それに先立ってジャカルタなどジャワ島で、アンボン人を標的とした紛争が起きていた。

1998年11月22日にジャカルタでアンボン人ギャングが仕切る賭博場と、7か所のキリスト教会が襲撃され14名が殺された。この前日にはアンボン人がジャワでモスクを襲撃したという流言が流されており、この事件全体がインドネシア人の90%を占めるムスリムの間に、キリスト教徒への敵意を広める陰謀であった可能性が高い。(7)

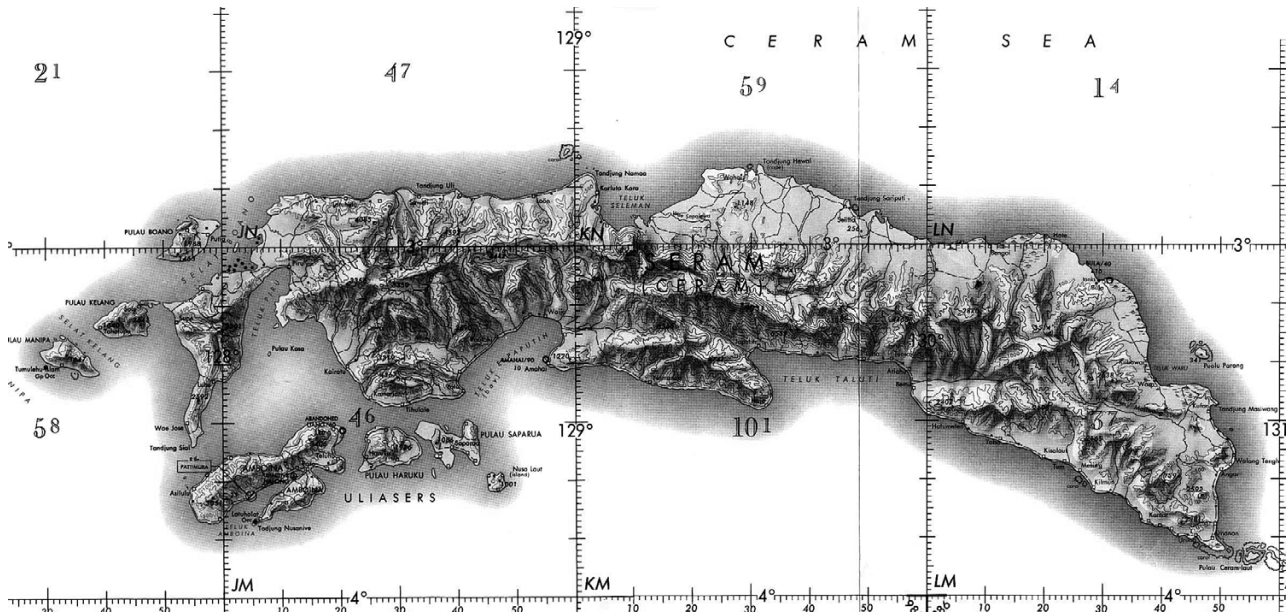
ジャカルタでの事件以来アンボンでも宗教対立に対する不安が高まったが、それが現実となったのが1月19日であった。発端については諸説あり、実際のところ不明だが、一説には、アンボン市内での、ミニバス運転手(キリスト教徒)と一人の若者(ムスリム)との、ささいな争いであったとも言われている。1月19日から約1か月、アンボン市のみでなく地域全体で、互いに殺し合いが行われ数百人が死んだ。(8)

以上が紛争の発端であるが、ここでもやはり、ムスリム、キリスト教の両方で多くの流言が流され、それがさらに殺し合いを激化させるという現象がみられ、ジャカルタの場合と同様に、アンボンでも紛争が何者かの意図によって煽られた可能性が高い。(9)





インドネシア周辺図



アンボン地域

1. 2 事態の推移

ひとたび紛争が始まると、当事者間での事態の收拾は困難で、当初は、互いに自分たちの居住地域から敵側の信者を排除して、静かににらみ合うことしかできなかった。それでも、流言などのきっかけで、新たな攻撃が繰り返され、事態は收拾のめども立たなかった。(10)

2月になり軍が増強されると、事態は大きく変化した。事態收拾のための軍の投入であったが、実際には軍の無差別発砲によって犠牲者はさらに増加した。このころ軍の一部は、紛争の拡大を図った形跡がある、民主化の進

行による利権縮小を恐れて、紛争拡大によって軍の重要性をアピールしようとしていたらしい。(11)

5月には、ジャワなどインドネシア国内各地から、ムスリムの義勇兵が地域に入り込むようになり、2000年には数千名規模となり、紛争が一層激しくなった。2000年9月までに約5000名が死に、多数の難民も発生し、2001年8月時点で、スラウェシ島だけでおよそ20万人強にのぼっている。(12)

2001年には、インドネシアからの独立を目指すキリスト教徒過激派組織RMS-FKM（南マルク共和国マルク主

権戦線)の活動もうわさされるようになった。<sup>(13)</sup>

### 1. 3 マリノII (Malino II) 合意

上述の通り事態は大変深刻化したが、2001年になると事態収拾に向けた動きも本格化し、安全地帯の設定や、安全地帯内での学校や市場の再開が実現した。<sup>(14)</sup>

そして2002年2月、両派の間で和平合意マリノIIが結ばれた。一般にはこれ以降、地域紛争は鎮静化し、散発的にテロ事件が発生しているものの、大規模な紛争の再発の可能性は非常に低くなった、と言われている。<sup>(15)</sup>

もともと日本では、この紛争に対して関心が低かったが、マリノII以降はいよいよ注目されなくなり、新聞などでもほとんど取り上げられなくなった。

## 2. マリノII以降の地域紛争

### 2. 1 概略

上述の通りマリノII以降、紛争は鎮静化してきているように見える。しかしその一方で、2001年頃から登場した、RMS-FKMの活動が次第に活発化し、2004年4月25日には、そのデモ活動がきっかけとなって、アンボン市内で大規模な暴動が発生し、一時紛争が再び激化した。その後治安部隊の増強によって、紛争は再度鎮静化してきているが、散発的に爆弾テロが発生し、負傷者がでる状況が続いている。<sup>(16)</sup>

なかでも、2005年8月のアンボン市内マルディカ市場爆破事件では9名が負傷<sup>(17)</sup>、11月には死者1名負傷者9名を出す村落間紛争が発生した<sup>(18)</sup>。さらに2006年3月、軍と警察が対立する事件が発生している<sup>(19)</sup>。

全体として、もともとの紛争の鎮静化が進むのと同時に、マリノII以前とは異なる形の紛争が展開している。以下、まずRMS-FKMについて説明し、ついで主な事件の概略を述べる。

### 2. 2 RMS-FKM

RMS-FKMは、南マルク共和国主権戦線を意味するインドネシア語の略称である。ただし、この団体が名称の一部に使用しているRMS(南マルク共和国)は、インドネシア独立直後に、この地域をインドネシアから分離独立させようとした、キリスト教徒の一部勢力が名乗った国名である<sup>(20)</sup>。

RMS運動自体は、ムスリムはもちろんキリスト教徒の多くからも支持されず、その運動は1950年の内にほぼ終息し、活動家の多くはオランダに亡命した<sup>(21)</sup>。

「そのRMSの残党が、インドネシアに戻り、今回の紛争にも参加している」という噂が、紛争開始直後からあったが、実際にはそのようなことはなかったと思われる<sup>(22)</sup>。したがってRMS-FKMは、RMSを名乗っているが、直接は無関係の組織であり、これがRMS運動の理想を引き継ごうとしているものであろう。

### 2. 3 2004年4月25日暴動

RMS-FKMの指導者マヌプティ (Alex Manuputti) は、2002年4月25日 (RMSの独立宣言52周年記念日) に、RMS旗を掲揚した罪で起訴され懲役3年の判決を受けた<sup>(23)</sup>。さらに2003年の4月にもRMS独立宣言記念日の祝典を計画しているとのうわさが流れて、州知事が軍と警察に対して厳重な取り締まりを指示したとの声明を出した<sup>(24)</sup>。

そして2004年4月、またもRMS-FKMが独立宣言記念祝典を計画しているとのうわさが流れ、12日に州政府と軍、警察当局は対応を協議、無政府状態に陥らず、RMS旗の掲揚が行われない場合には、祝賀行事を容認するとの方針を固めた<sup>(25)</sup>。そのような状況の中で事件は起きたが、概要は以下の通りである<sup>(26)</sup>。

独立宣言記念日25日当日、午前2時ごろRMS-FKM支持者が集中するクダマティ (Kudamati) 地区周辺で約5分間の停電が発生、電気が通じるとRMS旗が多数街路に掲げられていた。その後同地区PM小路にあるマヌプティの家で、RMS建国記念祝典が、約300人の出席者によって開催され、その場にはRMS旗と国旗が掲揚されていた。50分後警察部隊が現場に到着し、RMS旗をおろし、FKM事務局長トゥアナコッタ (Moses Tuanakotta) を逮捕し、徒歩で警察署へ連行した。

連行されるトゥアナコッタに同行しようとその支持者らが集まり、自然発生的なデモ行進のような状態となった。最初その数は200名ほどだったが、最終的には約1000名に膨れ上がった。道中多数の支持者がRMS旗を振りながら行進し、警察はこれを没収したが、没収しきれずに多数の旗が振られ続いていた。

警察署に到着すると、支持者らのうち40名ほどが警察と交渉して、その代表が署内に入ったが、その他の人々は帰宅した。警察は支持者らの帰宅に付き添い、これを護送したが、その途中トゥグ・トリコラ (Tugu Trikora) 地区からポホン・プル (Pohon Pule) 地区 (ソア・バリ: soa Baliの近く) のあたりで、12時半ごろインドネシア国旗を掲げた反RMS-FKMグループに止められ、投石を受けた。

これに対し警察が発砲し、8名が負傷し病院へ運ばれ、20名が逮捕された。この発砲をきっかけにしばらくの間、手榴弾とグレネード弾の爆発が続いた。目撃者によれば、攻撃は両方の側の民衆から起こった。

その後負傷した8名のうち6名が死亡、これによって両派の対立が激化し、マルディカ (Mardika) 地区まで拡大、前の紛争後再建されていた住宅が焼け、一人が焼死した。

1時間後には、暴動はポカ (Poka) 村とルマティガ (Rumatiga) 村に作られたばかりの難民住宅とキャンプにも飛び火し、一部住民は海に逃げ、泳ぎか船でガララ (GALALA) 村に逃れ、残りは軍の基地内に逃げた。

同じころ市内でも、暴動はアンソニーリボコ



(Anthony Rhibokh) 通りに拡大、ムスリム民衆が国連センターに放火、その後彼らはトゥグ・トリコラ地区に戻り、爆弾 (Molotov bombs) を投げ、最近再建されたアンボン市中心のシロ教会前でタイヤを燃やした。またタナ・ラパン・クチール (Tanah Lapang Kecil) 地区周辺では群集による放火がおこった。

暴動のなかで、人々は宗教的シンボルで互いに区別し、物を投げつけあい、爆弾や武器で攻撃しあった。また、トゥグ・トリコラ地区とアンソニーリボコ通り周辺には、住民と警察を狙う狙撃者がいたらしく、警官に2名の犠牲が出た。

犠牲者はこの日の日中だけで、最初の8名以外に、バクティ・ラハユ (Bhakti Rahayu) 病院に90名が搬送され、うち10名が死亡、それ以外にも死者は29名 (19名がキリスト教徒、10名がムスリム)、銃による負傷者は98名となった。

以上が、2004年4月25日の暴動の概略であるが、以下筆者の現時点での疑問を述べておきたい。

(1) なぜ、軍も警察も事前に取り締まれなかったのか？

RMS-FKMの行動は、事前に予想されていた。また、その場所もRMS-FKM支持者集住地区内の指導者の家であり、当然もっとも警戒すべき場所である。にもかかわらず、軍はまったく対応できず、警察の対応も50分後からであった。

(2) なぜ、警察はトゥアナコッタを徒歩で連行したのか？

暴動の起こりは、警察が反RMS-FKM集団に発砲したことだが、そもそも警察がトゥアナコッタの連行を自動車で行っておれば、自然発生的なデモ行進は起こりえなかったし、デモ参加者の帰宅を護送する必要も無かったし、RMS-FKM支持者に対する投石も起こらず、発砲も必要なかったのである。

## 2. 4 2005年8月市場爆弾事件

2005年8月25日午後2時半ごろ、アンボン市内のマルディカ市場で爆弾が爆発、9名が負傷した<sup>(27)</sup>。前項の暴動から1年以上が経過し、マリノII合意による紛争鎮静化が軌道に乗ったと思われた、この時期の爆弾事件は、負傷者9名という被害以上に、人々に大きな衝撃を与えた。

しかもこの事件には、人々に与えるそのような衝撃を目的に、計算されているように見える要素がある。第一に、標的がマルディカ市場だったこと。同市場は、1999年に紛争で破壊され、マリノII後に再建したものの、さらにその直後の前項の暴動で再度破壊され、再再建をされた。その市場での爆発には、多くの人が特別な意味を読み取らざるを得ないであろう。第二に、事件発生当時、マルク州知事が首都ジャカルタの副大統領官邸での会合で、マリノII合意の成果を報告していたこと<sup>(28)</sup>。

これらは偶然の一致に過ぎないかもしれないが、結果として、マリノII合意の成果による紛争終結という、政治的メッセージが大きく傷つけられたことは確かである。

## 2. 5 2005年11月の村落紛争

マリノII合意以前、特に紛争の初期には、村落間紛争が多発していた。これは主に流言に惑わされた村人が、近隣の宗教の違う村落を集団で襲撃する、というものだったが、ここでは、また違うパターンの争いが起こった。

2005年11月9日、西セラムのワコロロ (Wakololo) 村とリサバタ (Lisabata) 村で起きた。この時マルク州知事が、紛争で家を失った難民が帰村するための復興住宅の視察に訪れており、難民が復興住宅地区の清掃を行っていた。リサバタ村住民がこれを襲撃し、ワコロロ住民3名が負傷した。騒動はすぐに静められ、逮捕者は出なかった。<sup>(29)</sup>

これ以上の詳細が不明なのでよくわからないが、この事件はおそらく、復興住宅が建設されたワコロロ村に対する、それがなされていないリサバタ村住民のねたみが、原因であろう。2001年に筆者が調査したスラウェシでも、難民や難民住宅、難民キャンプに対する、周辺住民の嫌がらせ、襲撃などが起こっていた<sup>(30)</sup>。

住民一般の生活水準が低い中では、難民に対する支援であっても、一般住民は難民と生活水準や困窮度が差を感じているために、不公平感を感じてしまうのである。したがって、復興のためには、難民支援と並行して、地域住民全般の生活を改善する、地域復興のための支援を、同時に進める必要があるが、十分な資金や人員が無い中で、このことは非常に困難であろう。

## 2. 5 警察と軍の対立

2006年3月3日金曜日の夜、一人の兵士がレストランを出たところで、複数犯によって刺殺された。4日土曜日にも、同じ場所で別の兵士がやはり刺殺された。2件の事件によって緊張が高まり、兵士も警官も、それぞれ常に武装して集団行動を取るようになった。<sup>(31)</sup>

マルク警察部隊司令官によると、市内タントゥイ (Tantui) の武装警察本部前を、バイクで通りかかった兵士が、複数の警官に取り囲まれ殴打され負傷したことから、軍と警察の間に緊張が高まっていた。5日日曜日に同司令官は、これを行った警察官を厳しく処分する方針を示した。<sup>(32)</sup>

一方殺された兵士の所属するパティムラ旅団の司令官は、兵士と警官の対立に遺憾の意を表明し、殴打事件について、すでに警察当局と協議し、金曜日からは、共同パトロールを開始していることを、明らかにした。<sup>(33)</sup>

しかし当時市中には、「夜間、軍、警察双方が検問所を作って、互いに通行を制限している」、とのうわさが広まり、市民は夜間の外出を控えていた。<sup>(34)</sup>

また土曜日の夜には、複数の警官が市内バトゥ・メラ (Batumerah) 地区で人ごみに向かって発砲し、21歳の大学生を負傷させた。このことによって、一層事態は悪化した。<sup>(35)</sup>

この件についても詳細はまだわからないが、たった一

回の殴打事件をきっかけにして始まったにしては、あまりに急速に事態が深刻化したように思える。実は、兵士と警官の争いは、これ以前にも起きている。2005年の11月に結婚式の会場で、出席した兵士と警官が互いに集団で乱闘になり、民間人出席者3名が巻き込まれて負傷している<sup>(36)</sup>。この事件は単なる喧嘩と見られているが、兵士と警官の間の緊張は、今年に入って、急に一つの事件で起きたものでないことを示しているように思われる。少なくとも、2005年11月よりも以前から徐々に、両者の間に対立意識が醸成されていたのではなかろうか。

### 3. 結 び

以上に概観した通り、アンボン地域紛争は一般的には2002年2月のマリノII合意以降鎮静化してきていると言われるが、その一方でRMS-FKMをめぐる対立や、復興をめぐる住民間の争い、警察と軍の対立といった、新たな対立が表面化してきている。しかもそこには、いくつか不可解な疑問点があるように思う。そして筆者は、その疑問点が、明らかになっている紛争当事者以外の、何者かが何らかの意図で紛争を煽っている可能性を示唆しているように思う。

たとえば、2004年4月25日には、軍は暴動を放置したように見えるし、警察にいたっては暴動を作り出したようにも見える。また、マルディカ市場爆弾事件は、紛争終結が難しいことを、人々に印象付けることを、目的としていたように見える。さらに、兵士と警官の間での緊張の高まりも、明らかになっている経緯のみでは、とても説明しきれないように思えるし、また緊張の高まりの中で、両者の組織的対立を示唆するような流言（「両者が検問所を作って互いの通行を制限している」）が、流れている点も気になる。

したがって、紛争の最終的解決、復興の実現には、まだ時間がかかり、解決すべき課題も多いと考えられる。昨今、この問題への日本での関心は非常に低いが、日本をも含めて第三者としての国際社会も、この問題を依然注意深く見守る必要があるだろう。

#### 注

- (1) 2006年9月26日付けの外務省の海外渡航情報では、ナンダル・アチェ・ダルサラム州の内戦、マルク州アンボン島での武力紛争、パプア州及び西イリアンジャヤ州の分離独立問題および州の分割問題、中部スラウェシ州と東ヌサトゥンガラ州の西ティモール地域の宗教的対立による爆弾事件や武力衝突などに言及し、注意を呼びかけている。
- (2) 1997年7月に始まり1年以上も続いた、東南アジア各国通貨の為替レート暴落による経済危機。欧米投機筋による計画的な「バブル崩壊」の結果である。
- (3) インドネシア・スマトラ島北西端にあるアチェ州を

めぐって、インドネシア政府と独立派武装組織「自由アチェ運動」(GAM)が武力紛争を続けてきた。天然ガスなどの資源収入が中央政府に吸い上げられ、地元還元されないことへの不満から、1976年末にGAMが独立を宣言。内戦で1万5千名が犠牲になったといわれる。2004年末のスマトラ沖地震と津波をきっかけに、2005年8月15日に和平協定が成立した。

- (4) もともとポルトガルの植民地であったが、1975年インドネシア軍が侵攻、以後インドネシアからの独立運動が展開したが、インドネシア軍の武力によって運動は押さえ込まれていた。ところが1999年、国連がこの問題に介入し、独立についての住民投票が実施され、2002年5月東チモール民主共和国が成立した。以上は、小松邦康『インドネシアの紛争地を行く』めこん2003年、93~157ページ。
- (5) 小松邦康『インドネシアの紛争地を行く』めこん2003年。
- (6) 2002年10月バリ島爆弾テロ事件、2003年8月首都ジャカルタのマリオット・ホテル爆弾テロ事件、2004年9月9日オーストラリア大使館爆弾テロ事件、2005年10月1日バリ島同時爆弾テロ事件など。
- (7) 小松前掲書、18~19ページ。
- (8) 小松前掲書、21~26ページ。
- (9) 小松前掲書、21、25ページ。
- (10) 小松前掲書、21~66ページ。
- (11) Human Right Watch *The violence in Ambon*, 1999, <http://www.hrw.org/reports/1999/ambon/>
- (12) ムスリム義勇兵については、小松前掲書、35~38ページ。難民については、河野佳春「マルク難民訪問記」『広島東洋史学報』第6号2001年。
- (13) 「RMSが紛争に参加している」といううわさは、2001年7月、8月のインドネシア調査の際、ジャカルタでもスラウェシでも耳にした。それから、小松前掲書、57ページ、にも記載がある。
- (14) 2001年7月28日マカッサルにて、元イスラム高等専門学校校長サレ・プトゥヘナ氏へのインタビュー。
- (15) 小松前掲書、67~69ページ。
- (16) 外務省海外渡航情報インドネシア向け2006年9月26日。および在ジャカルタ総領事館発総領事館からのお知らせ、2004年4月28日。
- (17) Nine injured in latest Ambon bomb blast, *the Jakarta Post*, Jakarta August 26, 2005.
- (18) Clash erupts in Ambon, *the Jakarta Post*, Jakarta November 09, 2005.
- (19) Tension intensifies in Ambon city, *the Jakarta Post*, March 06, 2006.
- (20) 『インドネシアの事典』同朋舎、1991年、420ページ。
- (21) 同上。
- (22) 同 (13)。

- (23) FKM defies Maluku authorities, *the Jakarta Post*, Saturday, 12 April, 2003.
- (24) No compromise with RMS: Officials, *the Jakarta Post*, April 11, 2003.
- (25) W. Richard Rowat, chronology of Ambon Unrest Ambon 25 April 2004, Ambon information website, :  
<http://www.websitesrcg.com/ambon/documents/PGI-April25-2004.htm>.
- (26) 同 (25), および, Fresh Ambon clash kills six, *the Jakarta Post*, April 26, 2004. および, Fragile peace revealed, *the Jakarta Post*, April 28, 2004.
- (27) 同 (17)。
- (28) 同 (17)。
- (29) 同 (18)。
- (30) 河野佳春「マルク難民訪問記」『広島東洋史学報』第6号2001年。
- (31) 同 (19)。
- (32) 同上。および, Police officer questioned over clash in Ambon, *the Jakarta Post*, March 07, 2006
- (33) 同 (19)。
- (34) 同上。
- (35) 同上。
- (36) Cavalry called in, brawl erupts, *the Jakarta Post*, November 22, 2005.